参考資料

平成26年度の行政事業レビューの公開検証に関する
アンケート調査結果について

平成27年２月25日

○　平成26年度の行政事業レビューでは、外部有識者等の参加を得て、事業を公開検証するため、６月に各府省による「公開プロセス」（10府省66事業）、11月に行政改革推進会議の下で「秋のレビュー」（10府省14テーマ47事業）を実施した。

○　今後の行政事業レビューの取組の改善に活用するため、「公開プロセス」に参加した外部有識者及び「秋のレビュー」に参加した評価者に対し、アンケート調査を実施した。

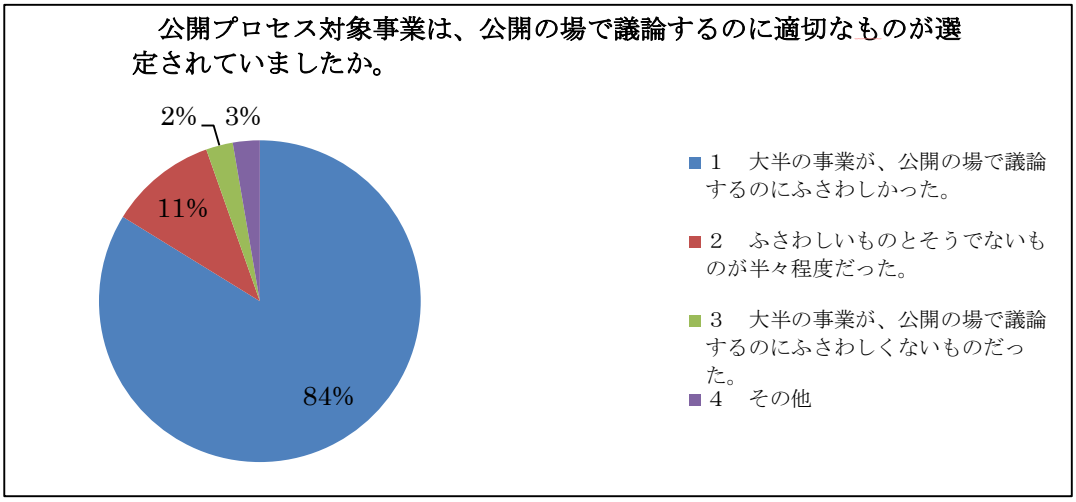
○　アンケート結果は以下のとおり（下線は事務局が付した。）。

１．公開プロセスアンケート調査結果について

公開プロセスに参加した 79 名の評価者にアンケート調査を実施したところ、37 名から回答が得られた。

アンケート調査の概要は以下のとおり。

①　公開プロセス対象事業の選定について



平成 26 年公開プロセス対象事業については、客観性を向上させ、公開検証が望ましいと判断されるものが国民の視点で選定されるよう、外部有識者会合を活用し、外部有識者から意見聴取等を行った上で選定を行うこととした。

ア　対象事業の選定

公開の場で議論するのに適切なものが選定されていたと回答する外部有識者が８割を超えた。

その一方で、

○　「行政執行」的な事業の典型で、事業の執行方法に公開の場で議論するに値するような工夫の余地があまりないように感じました。

○　案件の抽出が議論の対象になりにくいものばかりだった。もう少し、削減余地や非効率なことが明らかな業務に正面から向き合うべきだったのではないかと感じる。

○　内容的には、議論の対象とするに適した事業でしたが、事業年度が平成２６年度までのものが、７件中４件ありましたので、今年度で終了する事業に対する意見が、今後、どのように反映されるのか疑問に思いました。

○　省庁ごとにバラツキがあるものの、金額が 1 億円程度と下限ギリギリのものを意識して選んだと思われるケースが多いように思います。

○　金額的重要性が少ない事業などは、公開の場で議論する意義が低く、省内の自主的なチェックをされたい。

などの意見があった。

イ　選定の方法

公開プロセス対象事業の選定の方法については、

○　客観性、国民の視点を考慮した選定は評価できる。

○　前もって選定基準とそれに基づいた対象事業が示され、意見があれば、連絡することとなっていた。特に問題点はない。

○　事前に選定された事案とその理由について、選定されなかった事案と併せて説明を聞いた。やり方としては適切だったと思われる。

などの肯定的な意見があった一方で、

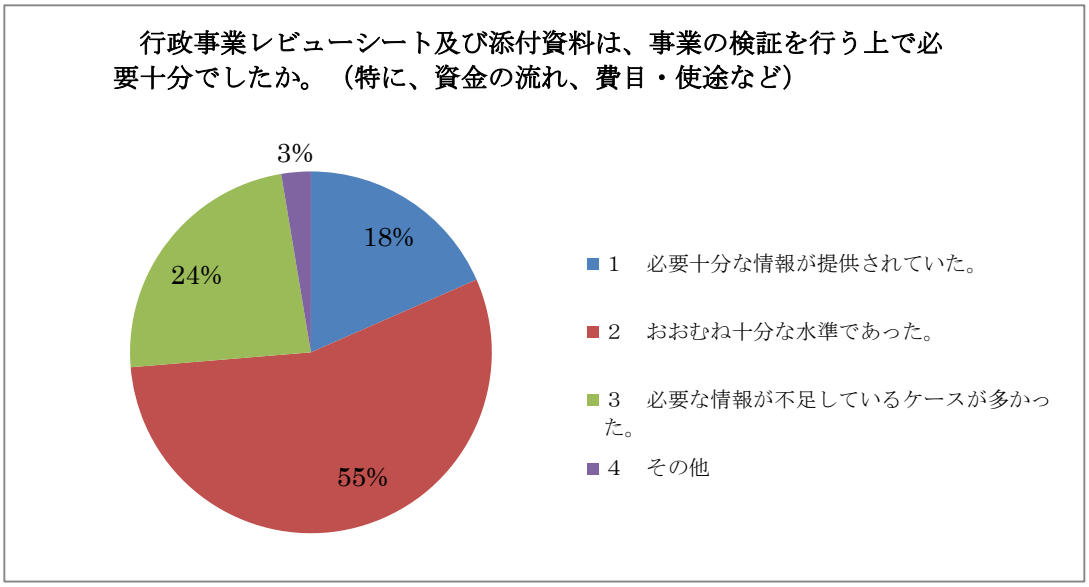
○　非常に多数の事業のすべてを詳細に検討する時間がない中にあっては、やや形式的に終わったように思われました。最終的に４件選ぶとして、事務局で 10 件名ほどの候補件名をあげていただき、それらについて詳細に検討して絞り込むというあたりが対応可能なやりかたのように思います。

○　所管する事業は全体が良く見えなかったので今後の事業選定においては、全体との関連において選定すべき。

○　事業選定にかかわる場合は、関係省庁の大まかな事業区分を紹介していただき近年行われたレビュー対象と本年度候補を挙げていただければ選定がしやすい（民間企業で活用する組織図のようなツリー図で事業の俯瞰図を示していただけるとありがたい。）。

などの意見があった。

②　公開プロセス対象事業のレビューシート及び添付資料の情報について



「事業を検証するに当たって、レビューシート及び添付資料の情報は必要十分なものであったか」を聞いたところ、「必要十分な情報が提供されていた」及び「おおむね十分な水準であった」と回答した割合は約７割となっている。

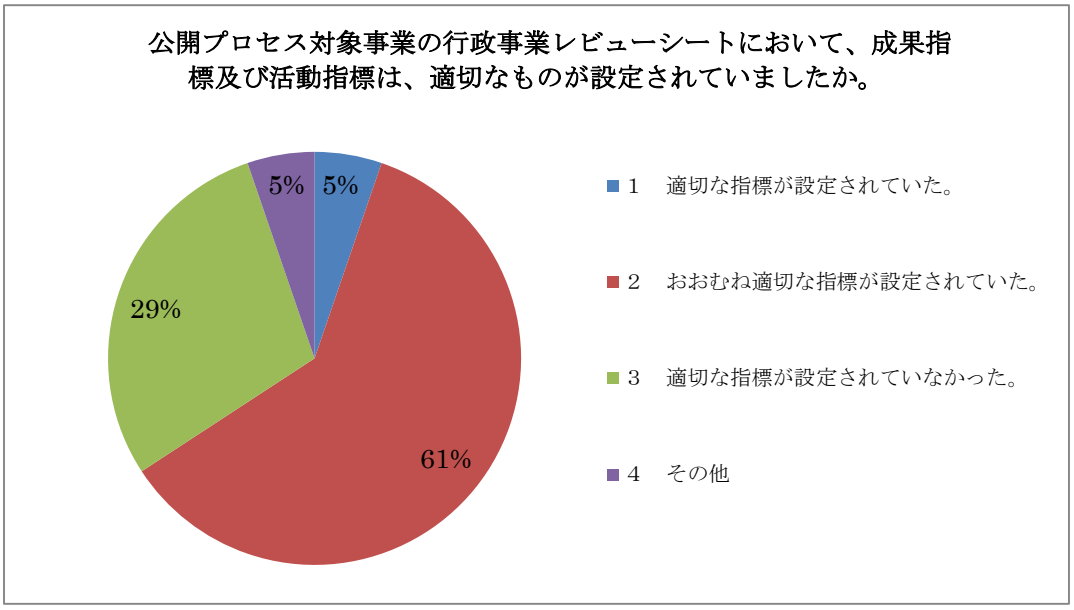
他方、意見の中には、

○　必要な情報が決定的に不足しているということはなかったと思います。しかしながら、とても分かりにくい資料が目立ちました。レビューを受ける側は、有識者というよりも国民に説明するためにはどのような工夫が必要かを考えて、準備することが求められていると思います。

○　フォローする資料も用意いただき、資料としては十分だったのではないか。ただ、もう少し、資料を裏付けるための数値による根拠があると、より具体的に踏み込んだ議論ができたのではないかと思う。

などの意見があった。

③　公開プロセス対象事業の成果指標及び活動指標について



「レビューシートの「成果指標」及び「活動指標」欄に、適切な指標が記載されていたか」を聞いたところ、「適切な指標が設定されていた。」又は「おおむね適切な指標が設定されていた。」との回答は、７割弱であり、３割弱の外部有識者は、適切な指標が設定されていなかったと回答した。

外部有識者からは、

○　一部の事業に、「アウトプット」指標と、「アウトカム」指標を混同しておられるようにみられなくもない事業がありました。

○　指標が数値で示しがたい場合に、「示せない」で終わっているケースがあり、その場合には定性的な指標を具体的に説明すべきであると思う。

○　活動指標はある程度理解できたが、成果指標は理論的因果関係がわからないものが多かった。その意味でより適切な成果指標を設定するような努力が必要と考える。

○　何を目標とし、どのような上位目標の元にあるのかのかが、明確でないのですから、適切な指標が選定されている根拠が欠落していることを意味します。

○　各事業担当者は「アウトカム」の意味がわかっていないように思った。また、成果指標・目標は必ずしも一つである必要がないにもかかわらず、書式スペースから「１つ」と思い込んでいるようだった。

○　予算との密接な関係があるものについては、アウトカムは表現しにくく、結果的にアウトプットレベルの指標となりがちです。「アウトカム志向」は

推奨されるべきですが、現実には「アウトプット」レベルの説明に留まることが少なくないというのが現実です。この点を踏まえれば、指標を複数ならべたり、補足説明を積極的に行っていただくなどの対応が、説明責任の向上に資するのではないかと考えます。

○　事業目的の達成を目指した指標設定がなされていない。

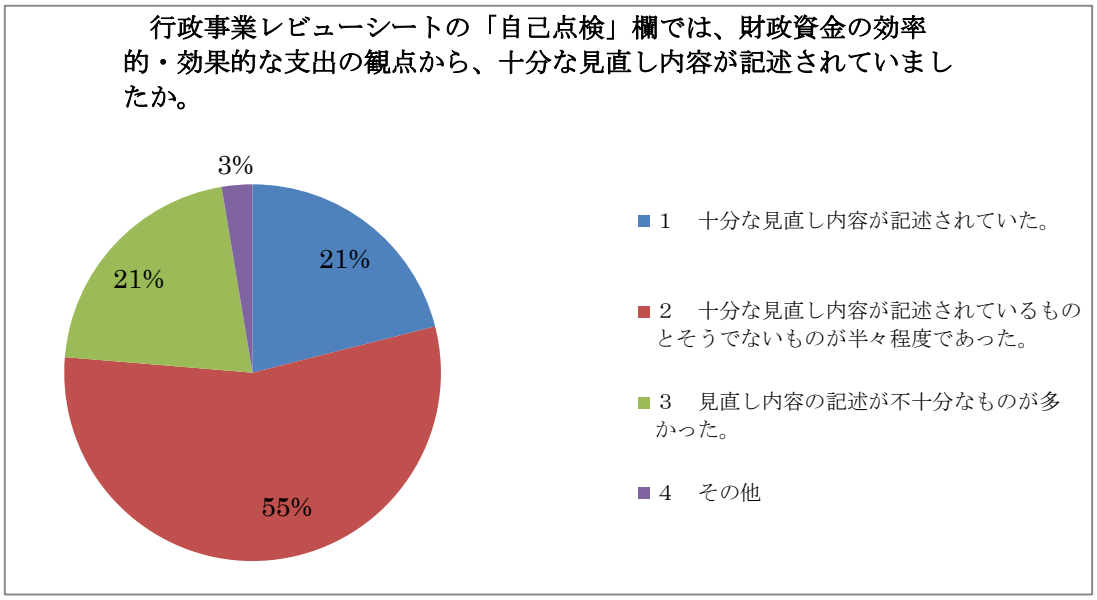
・たとえば、不正受給がないことを成果目標としており、時短導入目標が企業のうち何割に達したらよいかという観点がない。

・モデル化事業を目的としているなら経年でのモデル化比率を目標とするなど

成果目標が明示されていれば、終了年度をいつ目途にする事業なのか明確になる案件も増えると感じた。

などの意見があった。

④　レビューシートの「自己点検」欄の記載について



「レビューシートの「自己点検」欄に、財政資金の効率的・効果的な支出の観点から、十分な見直し内容が記述されていたか」を聞いたところ、「十分」が約２割、「十分なものとそうでないものが半々」が約６割、「不十分」が約２割と分かれた。

「十分なものとそうでないものが半々」、「不十分」を選択した外部有識者の中には、

○　見直し策に具体性が乏しく、努力するというコメントが多かった。法改正も含む、抜本的かつ具体的な解決策について踏み込んだ記述が期待される。

○　基本的に事業ありきの発想から書かれているような記述が多いと感じら

れた。国費である以上ある意味常にゼロベースの気持ちで見直す必要があると思うのだが。

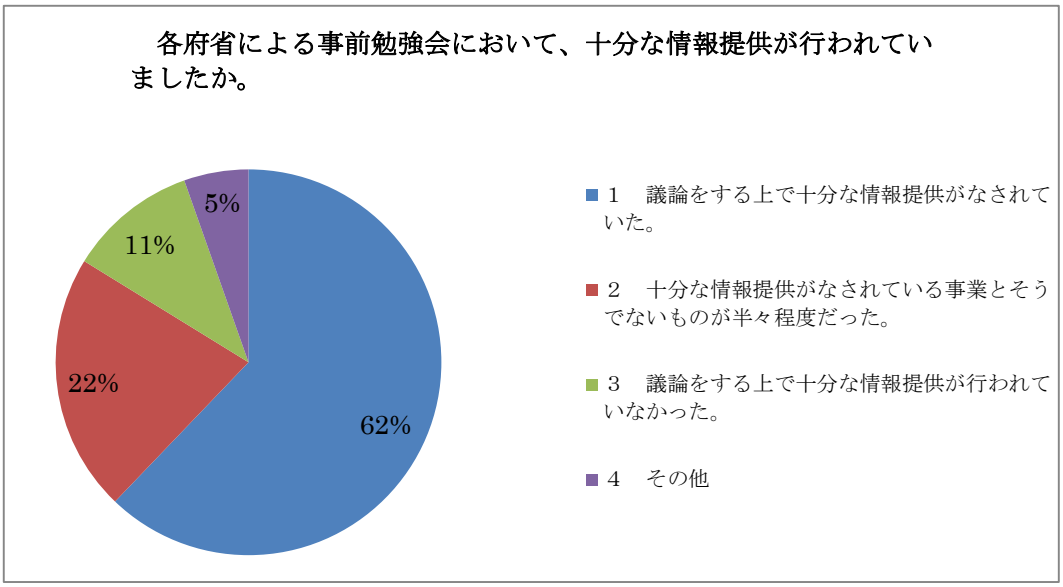
○　各府省の「自己点検」では、「前例踏襲」的に同じ趣旨の事業がえんえんと続けられていることの問題点を認識できていないケースが多いように感じました。その意味でも、外部の眼による点検も必要になってくるのではないかと感じました。

○　最初から「事業の現状での存続ありき」という思いが伝わってくる。直接の担当者が最も個別事業の改善点・課題を理解しているはずなので、もっと自ら論点を明らかにして欲しい。

などの意見があった。

⑤　公開プロセスの運営について

ア　事前勉強会における情報提供について



各府省における事前勉強会において、十分な情報提供が行われていたかを聞いたところ、「十分な情報提供がなされていた」との回答が６割を超えた。

外部有識者からは、

○　事前の説明、勉強会に加え、質問事項に関する追加的な回答、及び他の委員の質問に関する情報共有も適切に実施された。事前の勉強会において、事業等の特徴をつかむことができましたし、例年以上に、よく対応していただいたものと認識しております。

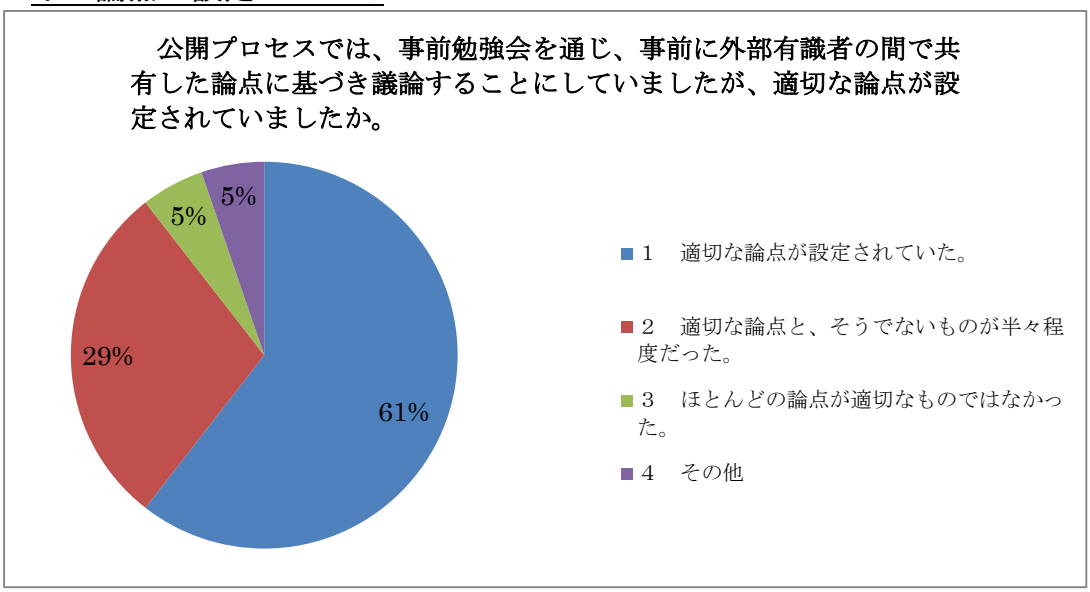
などと肯定的な意見があった一方で、

○　目的を一にする関連事業がある場合は、他事業との関係性・役割の違いを説明する資料を準備していただけると助かる。個別事業の必要性は理解できるが、関連事業との相対的関係性をみたら有効でないという判断もありえると感じた。

○　事業担当課の作成資料なのでやむを得ない面があるが、事業継続に不都合な資料は提出されない傾向にある。

などの意見もあった。

イ　論点の設定について



事前勉強会を通じ、事前に外部有識者の間で共有することとされた論点について、適切なものが設定されていたかを聞いたところ、「適切な論点が設定されていた」との回答が６割であった。

一方で、

○　事前勉強会の段階で提示された論点に関し、当方から拙見を申し上げさせていただいても、当日、提示された論点には、あまり変更が加えられていないケースが多かったように感じました。

○　事前に設定されていた論点は、表層的・形式的なものが多く、公開プロセス当日には、あまり意識することなく議論が進んだように思います。

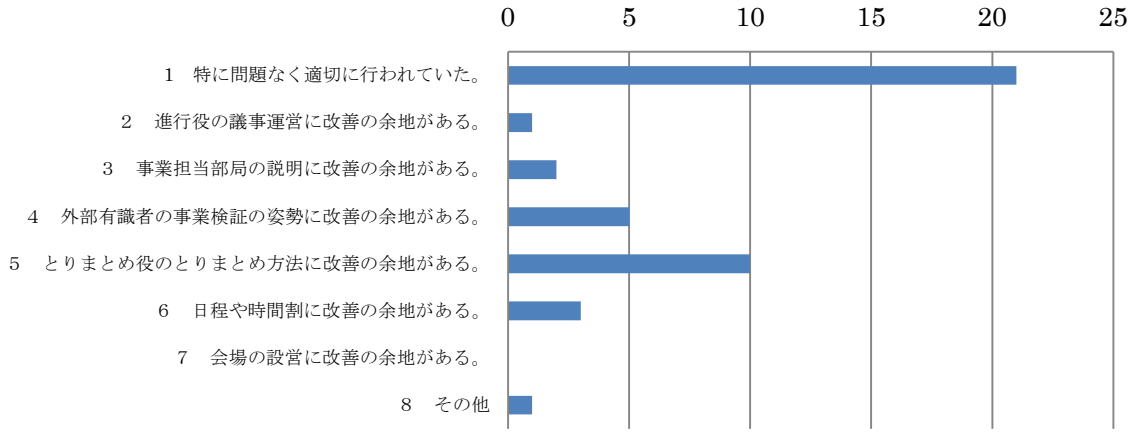
○　論点は適切であったが、その論点は、どの事業にも通じるような「効果的･効率的にする」というようなものであり、より具体的な論点を省庁自らが提示するべきだと思う。

○　一部の事業については、制度そのものの構造の問題が見え隠れしており、この点を論点にすべきだったと思う。（制度を議論する場合には、行政事

業レビューの議論だけでは不足するであろうから、行政事業レビューでの議論を契機にして、本格的な審議に移行するなどの取組が必要であろう。）などの意見もあった。

ウ　議事運営について

公開プロセスでは、進行役を各府省の官房長又は会計課長等が務め、外部有識者がとりまとめを行うこととしておりましたが、公開プロセス当日の運営は適切に行われていましたか（複数回答可）。



当日の運営は適切に行われていたかを聞いたところ、「特に問題なく適切に行われていた」との回答が一番多かった。

一方で、「とりまとめ役のとりまとめ方法」や「外部有識者の事業検証の姿勢」などに関して、下記のとおり改善の余地があるとの指摘も多く見られた。

（外部有識者について）

○　省庁側の有識者が決して「廃止」に投票することなく、省庁側が選任した外部有識者が決して「廃止」を選ばないという現象が見受けられました。

○　それぞれの想い、任命された背景に差があるため、「立場」でものを言う委員が少なからずいた。それは必要なのかも知れないが、客観性に欠ける可能性がある。

○　意見が同数で２つに割れた際に、取りまとめ役が苦労されている場面があった。多数決で行うことが良いかどうかというのもあるが、外部有識者の数は奇数である方がやり易いのではないだろうか。

（とりまとめ役について）

○　討議の参加者以外から選ぶ方法もあると思う。

○　省から推薦された方と行革から推薦された方との意見がどうしても対立構図のようになってしまう傾向があります。取りまとめ役の資質如何ですが、とりまとめ役はまた別の第3者にお任せしてもよいのではないかと思います（他省庁のレビュー担当者・有識者など）。

（議論の時間配分について）

○　事前の準備さえしっかりしておくことができれば、1事業あたり1時間という配分で、集中した議論をするのには、ちょうど適切なのであろうと感じました。ネット中継等でご覧下さる方々にとってのわかりやすさの面からも、1事業あたりこれくらいの時間配分がちょうどよいのではないかと感じました。

○　今回は、時間管理も適切で、各コマが有効に活用されていたと感じました。

○　有識者意見を取りまとめてからの、再度の調整の時間をもう少し確保していただきたい。時間の関係から取りまとめ者の見解で、最終案をまとめ急いだ感もある。

○　質疑応答でカバーできることではあるが、事業担当部局の説明に設定された時間10分は短すぎると思う。

（進行役について）

○　会計課長が進行役を務めるのは、非常に良かった。

エ　評価結果について

平成26年公開プロセスにおいては、評価結果の選択肢に新たに「廃止」を追加した。廃止の選択肢を追加したことについては、肯定的な意見が多かった。その一方で、廃止を含めた各選択肢の選択基準に関する外部有識者間での共通認識の不存在を指摘する意見や、しっかりとした議論を求める意見も多かった。

（選択肢に廃止を加えたことについて）

○　事業の「廃止」という選択肢はあってしかるべきである。廃止は、おおもとにある政策目的まで否定するものではないにもかかわらず、府省側の評価者には政策目的や府省の存在意義まで否定されるものとの誤解に基づくアレルギーがあったように思う。『政策目的は有意義かどうか』という点と、『政策目的を達成するうえで本事業が有効かどうか』（有効だけれど改善が必要、或いは他の方法を採るべき等）と分けるのも一つの方法だと思う。

○　「廃止」の項目を入れたことは良かったと思う。ただ、廃止の持つイメージが統一されていなかったように感じる。

「廃止」は、「今の状態では廃止、一から見直す」という意味だが、「廃止＝関連事業は今後一切しない」というイメージに捉えられていた場合もあった。「抜本的改善」も、「抜本的改善をするほうが良い」という意味とともに、「抜本的改善をしなければ、事業を継続すべきではない」という意味も伝えておくなど、意味を徹底することが求められるように感じた。

○　過去に公開プロセスで「廃止」としても結果として廃止にならない例や「抜本的改善」としても内容や予算にほとんど変更がない例などが多々あることから、外部有識者の中では、「廃止」にしないと事業改善はほとんど行われないとの認識がある。「廃止」は「廃止」、「抜本的改善」は「抜本的改善」をちゃんと実施して頂ければ、「廃止」は基本的に無くても良いと思う。（現状では無理だと思うが）

○　「廃止」がもたらす警鐘（効果）はやはり必要であるように思う。ただし、大きな判断を下すためには、論点を絞り込み議論を集中させる必要があるが、行政事業レビューでは、複数の委員が異なる視点、異なる点について一斉に話し出している格好になっているため、大きな判断を下すまでに議論が練られていないような印象を与えている。

○　評価結果に「廃止」を設けたことは、メリハリをつけるという意味でよかったとは思うが、本来、行政事業レビューはPDCAサイクルに重点がおかれるべきであることを考えれば、より建設的な議論をうながす仕組みづくりは必要になってくるように思えた。

○　事前ヒアリングや視察があるとはいえ、1時間弱という短い期間で「廃止」という判断するのは違和感を覚える。外部有識者の中には廃止を何度も主張される方がいたが、多くの場合には説明下手な説明者に対する心象に基づいたものが多く、行政事業レビューの観点からとは言い難いと思った。外部有識者の判断に「廃止」を設けるのは、適切とは言えないと思う。

○　「廃止」を復活させたことにより報道が「廃止」中心となる傾向がありました。コントロールの必要性はもちろんありませんが、報道に際し、「廃止」がつよい関心を呼ぶものであること、また行政事業レビューが「廃止」のための議論であるかのような報道側の認識があることを十分に認識し、踏まえておく必要があると考えます。

（選択肢に対する有識者間の認識について）

○　各評価の意味合いについて、評価者によって受け止め方が異なる場合があり、記入する前に、どれがどういう意味になるのかを確認すべきであったかもしれない。

○　取りまとめの段階で紛糾するケースが多くそれに時間がかなり費やされたが、あまり有意義な議論ではなかったように思う。評価者各人が述べているコメントはさほど大差はないが、結果選ばれた選択肢が異なる現象はよく見られた。評価者の真意を汲み取って取りまとめが行われるよう改善が求められる。

○　慣れの問題かもしれないが、「一部改善」「抜本的改善」「廃止」などの評価の意味するところを十分に理解していないケースがあったかもしれないように思われる。

○　「廃止」と「抜本的改善」の境界が難しかった。これ以上選択肢を多くすると票が割れるので、新たな選択肢を設定する必要はないと思うが、「一度事業を休止して、事業全体の在り方を見直したうえで継続」のような場合は、どの評価項目にすべきか迷った。「廃止」に「一時休止して見直すことを含む」を入れると「廃止」のトーンが弱くなるし、評価項目は現状のままで、とりまとめコメントでフォローするしかないのかもしれない。

○　廃止、抜本的改善、一部改善の考え方に差を感じたため目線あわせが必要。廃止の追加は明確ではよいと思うが、事業自体に必要性がないのか、事業の必要性はあるがゼロベースでより有効な方法を模索すべきなのかにも大きな意味の違いがある。

オ　とりまとめ方法について

平成 26 年公開プロセスからは、一致した評価結果及びとりまとめコメントを目指すこととし、外部有識者間で議論を行うこととした。

とりまとめ方法について、外部有識者からは以下のような意見があった。

（とりまとめ案に対する議論について）

○　今回から、意見が割れた場合に、単に多数の票を得たものではなく、調整することにしたのは良かった。これまでは、票が割れることもにらみながら採点する場合もあったので、今回からはより適正な評価が出来たと思う。

○　評価結果についての認識の相違について議論することは好ましいと思います。同じ問題認識を持ちながらも、異なるメッセージをもち、その結果、異なる結論に至る場合もありえます。

○　安易に両論併記とするのではなくもっと議論してまとめるべきだったと思います。
○　有識者は各自の立場から意見を述べており、それぞれの意見に相応の価値がある。重要なのは各有識者の指摘を事案に反映させることであり、あえて、「一致した評価結果」を求める必要はない。
○　有識者意見を取りまとめてからの、再度の調整の時間をもう少し確保していただきたい。時間の関係から取りまとめ者の見解で、最終案をまとめ急いだ感もある。
○　とりまとめの際に、とりまとめの評価結果が、個々の評価結果の平均を反映しないケースもあった。何らかの圧力がかかっていると国民が誤解しないよう、とりまとめについては、想定されるケースを考えつつ、ある程度のルール設定は不可欠である。
○　票が割れるケースでの取り扱いにやや府省よりになるケースがあった。
○　とりまとめについては、ほとんどの場合、各府省側の評価者と行革担当側の評価者との間で、大きな評価のずれはなかったが、一部では両者の評価が真っ二つに分かれ、とりまとめ結果が、府省側の評価者の評価に傾いたケースがいくつかあったように思われる。評価が割れた場合のとりまとめ方法に改善の余地がある。
○　自分ではないが、少数意見として全体と異なる意見を述べていた方もいたように思いますが、少数意見記載もあってもよいのではないか。

（その他）
○　公開プロセスにおいては、単純な結論ではなく、条件、改善点、将来への視点が重要である。
○　行政がやっているものの多くは不可欠なものが多く、止めることよりも改善することのほうが大切である点を考えると、改善方法を踏み込んだ記述ができるといいと思います。

カ　公開性の担保について

平成 26 年公開プロセスにおいては、一般傍聴までは要しないものの、インターネット中継（録画を含む）等により公開性を担保することとした。

公開性の担保について、有識者からは、

○　出来る限り国民の目に触れるようにすべきであり、ネット中継を継続するのが適当である。
○　ネット中継は、必要な最小ラインということで、可能であれば、事前申し込み方式にして人数を限ってでも、一般の方々にも傍聴をお願い

するとか、各府省の記者クラブを通じて呼びかけて、もう少しマスコミの方々にも傍聴していただくようにすれば、当日の緊張感がもっと増すうえ、広報効果も高まると考えられるため、よいのではないかと感じられます。

○　リアルタイムの公開がない省庁が多く、これが国民の関心を失わせる理由にもなったように思います。一般傍聴を認め、リアルタイムでインターネット中継することの意義は大きいと考えます。

○　今回の公開方法で良いと思うが、インターネット中継が有料であったとすれば、その点は改善の余地ありと思う。

などの意見があった。

⑥　その他

上記以外にも公開プロセスに関し、以下のような意見があった。

○　前政権時代の「仕分け」と「行政事業レビュー」と、大きくその性格が変わったことが、委員の間でどこまで共有されているのかは疑問。すなわち、「叩く行革」のみならず、「褒めて伸ばす行革」の双方から、自発的な改善を促すことを目指す現行制度と、無駄を洗い出して叩くことに主眼をおいていた前政権の「仕分け」とは似て非なるものであるが、この点を理解されている委員とそうでない委員がいるのではないか。

○　公開プロセスについて、単に、「対象事業のうちのいくつに『廃止』判定がされたのか」といった表面的な結果だけでなく、各府省の政策の設計や実際の運営に、どのような問題があるのか、その背後にこの国が抱える問題にはどのようなものがあるのか、といった点に関する情報を、国民が共有できる手がかりとなるように、せっかくのこの公開プロセスに関する広報活動に、もう少し力を入れてもよいのではないでしょうか。

○　今後の課題は、公開プロセスで指摘されたのと同様の問題を抱えている事業は、同一府省内にいくつもあるケースがあるはずで、それらに、この公開プロセスの成果をいかに波及させていくかではないかと感じました。

○　公開プロセスで批判を受けた点が、他の事業にも潜んでいないか、いわば「マイナスの水平展開」を行う必要があるのではないか。公開プロセスが「モグラたたき」にならないために。

○　気になっている点があるといえば、個々の事業のパフォーマンスに注目しすぎるために、上位概念である戦略ないし運営方針との整合性は、ほとんどチェックできていない。大阪市では運営方針－戦略－事業（ないし取組）の縦の整合性をチェックしている。同じ目標を達成するために複数の同様

の事業が走っている、または上位概念とは関係がない事業が入り込んでいることも多く、こういった縦の整合性について検討することは重要だと思われる。

○　自民党内閣の行政事業レビュー公開プロセスでは、政府の方針を明確にした上で、責任を持って推進する姿勢を示す点で、まだ十分とはいえない。効率性向上や波及効果などの観点から、予算の範囲内での事業のより効果的かつ効率的な実施、国民への説明責任の確保、透明性の確保、予算に含めたほうが高い効果が見込まれる政策課題の追加などを国民に具体的に示したうえで、国民に信頼されるような縦割りから離れた実効性ある行政を行うことが求められている。

○　公開プロセスであがった委員の改善の方向性の提示や指摘は非常に有益なものが多かったため、抜本的改善が求められた事業の改善案は早々に意見を反映して対応策をまとめて公表していただきたい。

○　調達制度の見直しなどの踏み込んだ議論をしていただきたい。いつまでたっても同じような問題を指摘するにとどまり、進歩がないようにも感じる。

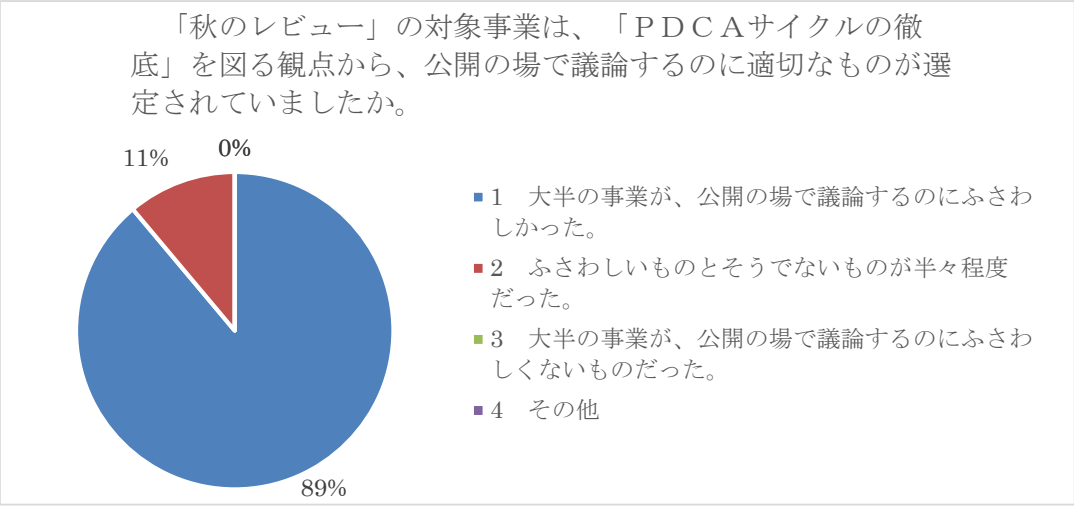
２．「秋のレビュー」アンケート調査結果について

「秋のレビュー」に参加した 18 名の評価者にアンケート調査を実施したところ、９名から回答が得られた。

アンケート調査の概要は以下のとおり。

①　「秋のレビュー」対象事業及び論点について

ア　「秋のレビュー」対象事業



「秋のレビュー」の対象事業について、「ＰＤＣＡサイクルの徹底」を図る観点から、公開の場で議論するのに適切なものが選定されているか聞いたところ、「大半の事業が、公開の場で議論するのにふさわしかった」と回答する評価者が約９割であった。

評価者からは、

○　レビューに参加した件名のほか、事前説明に関わった件名についても、大なり小なり問題を感じた。説明に当たる省庁の方々自身も、同様の「疑問」を感じ取っているように思える場面もあった。

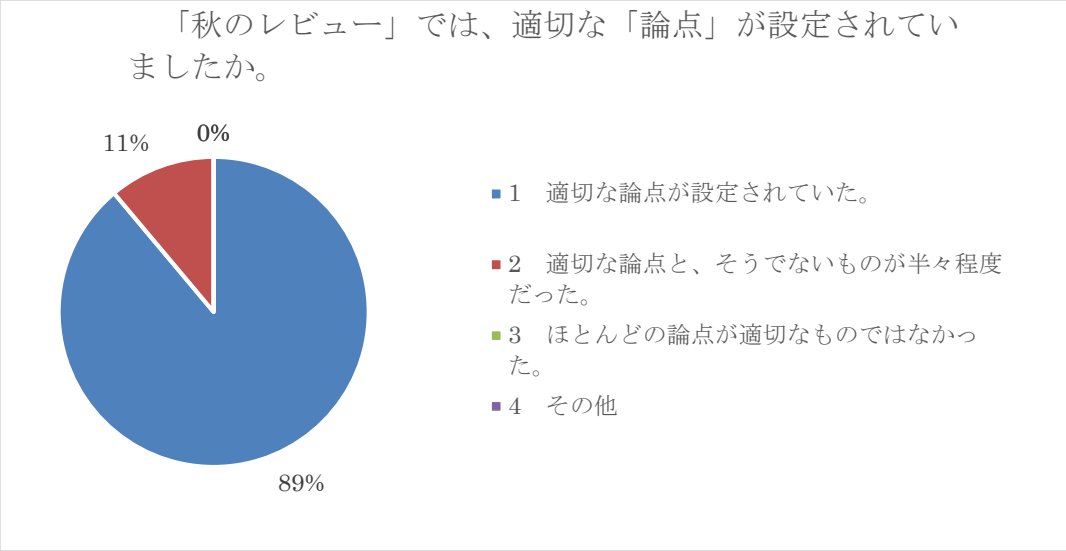
○　同じ目的をもつ事業をひとくくりとして、レビューを行う今回の取り組みは、とても評価できます。各省庁にも、複数の事業をワンセットで考えるべき、という思考回路を埋め込むことができたのではないかと思いました。また、同じような成果指標をもっている事業をひとくくりで考えることもできると思いました。

○　ＰＤＣＡサイクルが適切に実施されている事業は見られなかった。

○　内閣の重要施策の中にも、絞るべき事業と加速すべき事業のメリハリが必要であることが見えた。また加速すべき事業についても、好事例の横

展開に参考となる取組を共有できる機会となった。
などの意見があった。

イ　論点

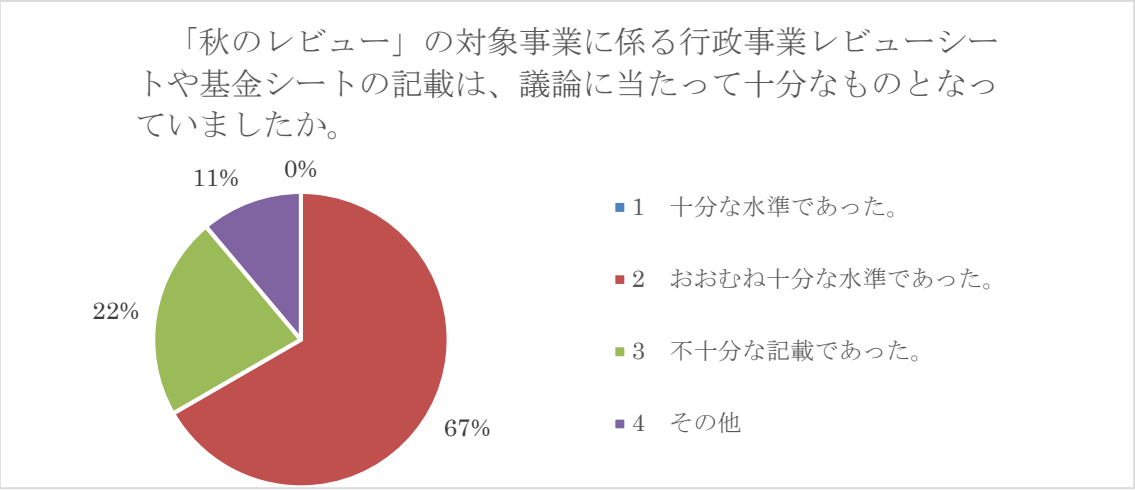


「秋のレビュー」の論点について、適切な論点が設定されていたか聞いたところ、「適切な論点が設定されていた」と回答した評価者は約９割であった。

一方で、

○　秋のレビューは、主務省ではなく、行革事務局側が論点を設定するにもかかわらず、「政策の温存」「現状維持」を前提としているような論点や、問題の抜本的な解決に向けて取り組むことを前提とはしていないようにも感じられる論点があった。「論点」およびそれらに対応する「選択肢」について、もう少し、行革事務局と評価者がじっくり検討する時間をとってもよいのではないか。
などの意見があった。

②　「秋のレビュー」対象事業のレビューシート及び基金シートについて



議論にあたって、レビューシートや基金シートの記載が十分であったか聞いたところ、「おおむね十分な水準であった」と回答した評価者が約７割であった一方で、約２割の評価者が不十分であったと回答した。

評価者からは、

○　「おおむね」というのはやや甘い評価だが、全体としては無難な記載になっていたという意味である。当該事業の問題点と思われることに関連する部分にかぎって不十分な記載がみられたという感じを持つ。

○　議論の上では十分な水準だとは思いますが、いつも重複排除欄に記載がないのに、同じような事業が他になされていることが散見されます。これをどのように改善すべきか、今後も課題だと思います。

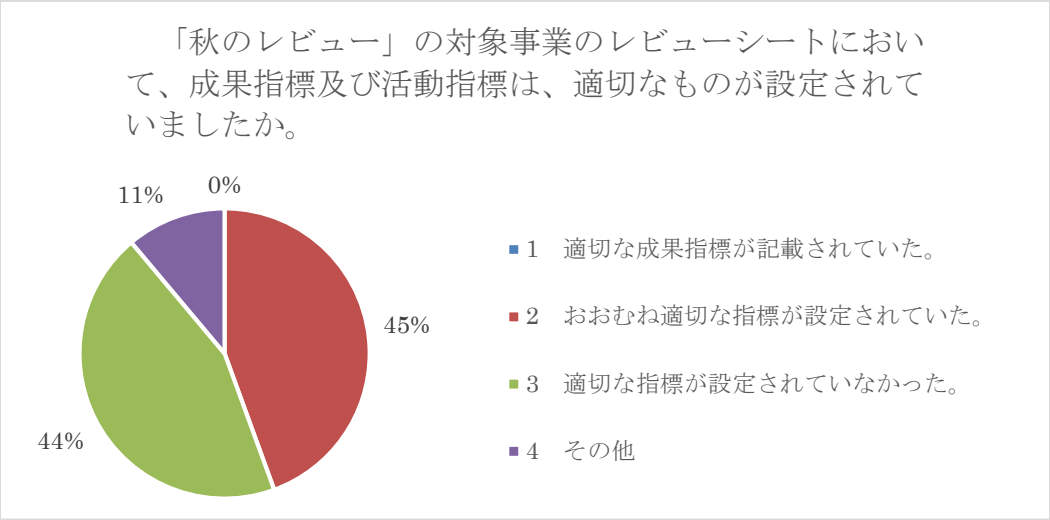
○　府省横断的なテーマの一部について、複数事業のシートを俯瞰してみることが難しく今回のようなレビューで横断的に議論し、参考資料がなければ全体像を把握することができない。

○　基金シートに関しては修正を検討する余地がある。①国費・民間の出捐の割合、②基金という形式が必要な理由等。

○　（基金シートについて）もっと簡潔なほうが見やすく、議論しやすいと思う。

などの意見があった。

③　「秋のレビュー」対象事業の成果指標及び活動指標について



「成果指標及び活動指標欄に、適切な指標が記載されていたか」を聞いたところ、「おおむね適切な指標が設定されていた。」、「適切な指標が設定されていなかった。」と回答した評価者は、ともに４割強であった。

評価者からは、

○　中には、明らかに問題を「そらす」ような指標設定も見られたが、実際、様式に合う指標設定が難しい事業もあるように思えた。もっと「自由な記載」を許す様式を考慮してもよいのではないか。

○　成果指標については、適切な指標が設定されている場合もあれば、されていない場合もあります。されていない場合は、確かに望ましくはないですが、現実的には難しい場合もあります。

○　府省横断的な取組については、共通の成果、活動指標を持つことが望まれる。

○　定量的な目標を設定することが十分に可能であるにもかかわらず、定性的かつ曖昧な指標が掲げられている例や、事業・政策の設計自体に問題があるため、指標についても、財政資金をどのように使ったのかを表面的にとらえるような指標や、財政資金を使ったことを単に確認するに過ぎない指標しか設定されていない例などが見受けられた。

などの意見があった。

④　事前ヒアリング現地ヒアリングについて

「秋のレビュー」の対象事業の選定を行うにあたり、評価者による事前ヒアリングを行った。

また、対象事業の理解を深めるため、議論に先立ち、現地ヒアリングを実施した。これらについては、評価者からはおおむね肯定的な評価が得られた。

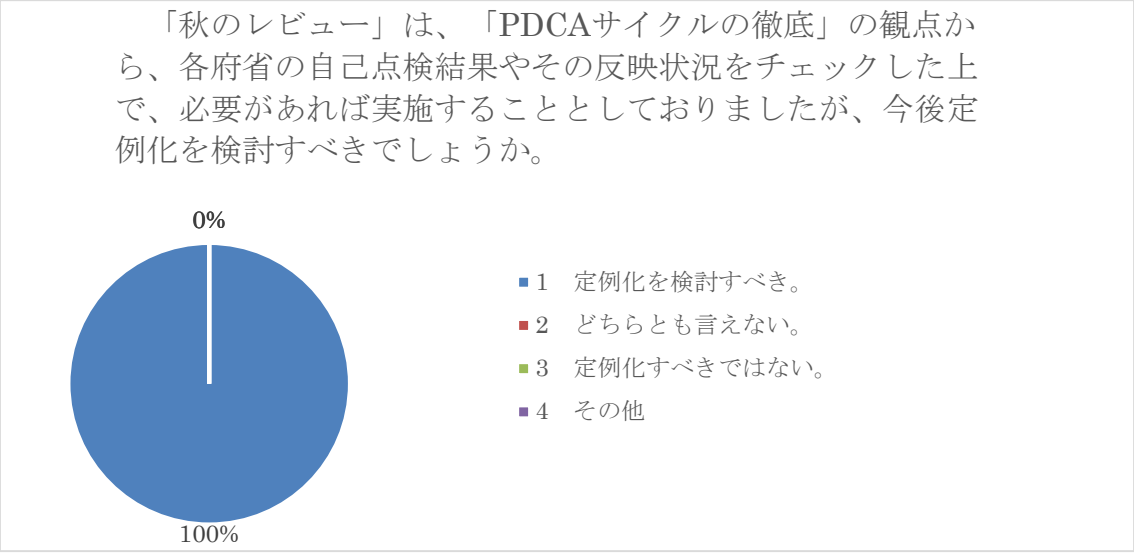
評価者からは、

○　現地ヒアリングは、文字資料ではわからない部分を知るのには有効と思うが、それが是非必要となる案件はどれくらいあるのか、とも思う。

○　事業の候補を絞り込む段階で、候補事業と論点を簡単な一覧にして頂いた上で、その段階から意見を言える機会があるとコミットメントが高まり、より深い議論が可能になるかとも思いました。

などの意見があった。

⑤　「秋のレビュー」の定例化の是非について



平成 25 年以降、「ＰＤＣＡサイクルの徹底を図る」観点から、毎年「秋のレビュー」を実施してきたことから、「秋のレビュー」の定例化の是非を評価者に聞いたところ、全ての評価者が「定例化を検討すべき」との回答であった。

評価者からは、

○　概算要求前に行う公開プロセス、概算要求後に行う秋のレビューともに、PDCA サイクルから考えて、タイミングもよく、有益な工程になっていると考えます。

○　レビュー１回当たりで扱える事業の数には限りがあると思われるが、そこ

から最大限の行革効果が得られるようにするためには、各事業がいつ、レビューの対象にされるかわからない、という緊張感のある制度にしておくことが有益であると考えられる。そのためにも、レビューの定例化や、できれば法制化が望ましいのではないか。

○　そもそも PDCA サイクル上の問題がない府省はないと思われますから、結果的に定例化することになると思います。

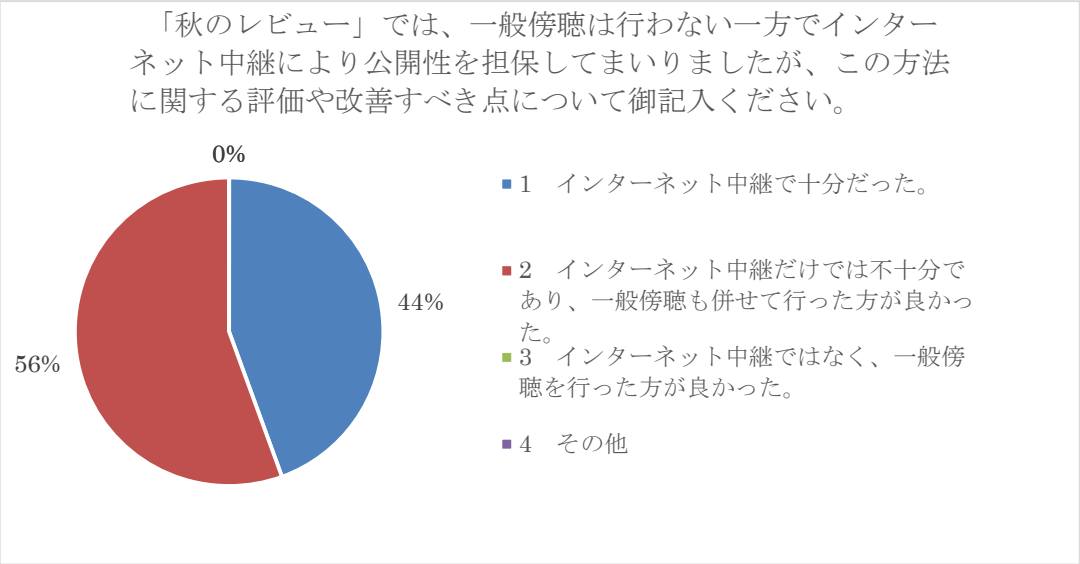
○　各府省の自己点検には限界があると思う。

○　以前の「事業仕分け」で、圧倒的に「廃止」意見だったものが、（おそらく「大幅に見直した」ということで）実施され、結局見事に失敗したという事例もみられる。絶対に継続すべきであるし、「その後」のフォローもすべきであると思う。

などの意見があった。

⑥　「秋のレビュー」の公開方法と国民の関与の在り方

ア　公開性の担保について



「秋のレビュー」の公開性の担保の在り方について聞いたところ、「インターネット中継で十分だった」と回答した評価者が４名であった一方で、９名中５名の評価者が「インターネット中継だけでは不十分であり、一般傍聴も併せて行った方が良かった」と回答した。

評価者からは、

○　可能ならば、一般傍聴を行うべきだと思います。できれば傍聴だけでなく、判定もやってもらえればよいと思っています。ただし、公正性を担保するのは、コスト面から難しいです。いま、地方自治体の「事業仕分け」

では、市民判定人方式をとる場合が多くなっています。無作為で市民に判定人になることをお願いして、希望者に来てもらうような形です。

○　インターネット中継だけでなく、一般傍聴も行い、この両方の視聴者、会場参加者との双方向性もとりいれた、国民参加型のレビューにしていくことが望ましいと考えられる。

などの意見があった。

イ　「秋のレビュー」への国民の参加について

「秋のレビュー」においては、国民参加型の取組となるよう、広く国民から事業改善に係る意見を募集し、議論の中で紹介することとしたところ、4,252 件の意見が寄せられた。この取組について、

評価者からは

○　この点は、国の事業について、国民の理解を深めてゆくには、とてもよい取り組みだと思います。できれば、視聴者にリアルタイムで判定ができる仕組みがあればよいとは思いますが、利害関係者が多く参加してしまう可能性を排除できないので、難しいように思いました。

○　双方向性を重視した取り組みは、大変よかったと思う。ただし、レビューが行われていることを知らなければ、国民の側から、レビューにツイッターで応答することもできない。この日程でレビューが実施されており、インターネット中継がなされていて、国民もその議論に参加できる、ということの世間への周知が不十分であると思う。

○　視聴者からの意見を議論の時間中に紹介するなら、紹介した意見に対するフィードバックを司会者が何らかの形で行うのがよい。紹介するだけでは、意見を出した視聴者が満足しないのではないか。

○　よかった。短時間のため視聴者のコメントを紹介する時間はなかなかないが、場合によって視聴者による評価の選択も参考までに受付公表を行うと、参加意識が高められる。

○　今回感じたのは、紹介された「視聴者からのご意見」が、いずれも極く短文で、「ニコニコ動画」の視聴者層の特徴が出ていたように思われ、やや物足りなかった。

○　良いと思いますが、意外に少ないという印象でした。レビューシートを公表して事前に意見募集するなど、もうひと工夫あってもいいように思います。

○　視聴者が少ないこともあり、適切な意見が寄せられていなかったように記憶している。

などの意見があった。

⑦　その他

上記以外にも「秋のレビュー」に関し、以下のような意見があった。

○　横断的に案件を議論する場として、非常に有効な機会でした。春は個別事業のみの点検だったが俯瞰することで有効な議論ができる機会として秋のレビューに参加させていただきよかった。

○　前回廃止を受けながら、再度予算申請して生きている場合には、必ずレビューすべき。

○　改善点はかなりすでに改善されてきていると思います。あとは、継続が大事だと思います。

○　「秋のレビュー」のオープニングセッションは、視聴者からの意見を募集し、双方向の意見交換を一部可能にする「場」として貴重な時間といえる。

○　全体の進め方に特段の問題は感じなかった。また、今回は、取りまとめを「次の議題」の後にするという改善をして頂いたのでよかったと思う。

○　とりまとめコメントの発表を１事業分、遅らせることになったが、視聴者の立場からすれば、１つの議論に集中してきいていたものが、最後のとりまとめコメントをきくまでの間に、別の事業が入ってしまい、印象がぼやけてしまうのではないか、という点が気になった。評価者の立場からしても、次の、別の事業の議論に参加しながら、同時に前の事業のとりまとめコメントに目を通すのはやや大変であった、というのが正直なところであった。

○　限られた時間の中でやっていることですから、難しいのは承知の上ですが、取りまとめコメントの日本語がややわかりにくいかと思います。また、その他に書かれた内容の中で取りまとめコメントに反映されなかったものはどこでも公表されていないように思います。その他のコメントこそ、評価者が自らの視点で捉えた意見ですので、できるだけ公表するようにして欲しいと思います。

○　取りまとめ方法はPCを使用して改善がなされたが、依然として時間がかかっており若干間延びした感がする。

○　初めて申し上げることがらではないが、事業仕分け、レビューで指摘した問題について、同様の事情が「他事業」にないか、という「負の「水平展開」が行われない限り、永遠の「もぐら叩き」になるように思われる。

○　廃止されたはずの事業内容が、他の事業に紛れて「ゾンビ」化していないか、というチェックはどうなされるのかが気になるところである。

○　個々の事業については、「これは駄目だ」という事例を指摘することが、レビューの現場では重要になっていると思います。

○　個々の事業のレビューの結果を、よりいっそう一般化し、横串を指してゆくことは重要だと思います。たとえば、「多面的」「先導的」というような名

称がつく事業がありますが、そのような文言がつく事業には、どのようなチェックが必要なのか、経験を積み重ねているので、一般化ができれば、各府庁がもつレビューにあがってこない事業についても、効果をもってくると考えます。

○　私は、国会議員がレビューシートを使って議会で議論するような光景を見たいと思っています。いまのレビューの現場は、どのようにレビューシートを読むのか、という「実演」でもあると考えます。議会での国会議員の議論の質の向上のために、レビューができることは何か、という視点で、今後も考えてゆきたいと、個人的には思っております。

○　レビューシートをインターネットで公開されているサイトを拝見させていただきました。検索も可能となっており、この取り組みはすばらしいと思います。ただ、ややわかりにくい場所にあるように思いますし、ほとんどの国民は知らないように思えて、この点は残念です。できれば、より国民が活用できるように、宣伝をしてもらえれば嬉しいです。

○　これまでレビューで扱ってきた事業には様々なものがあり、その大半は、東京で議論すればよいものかもしれないが、なかには、各地方が受益者となっているような政策もある。例えば農業関係の事業や、商店街活性化の事業について、その事業の受益者となっているような地方都市で開催し、主務府省と評価者、制度官庁のみならず、当該都道府県の担当者や業界の関係者にも参考人として同席してもらい、一般傍聴も受け入れて、双方向での議論を展開してはどうか。

○　所管課による基金シートへの記入にミス、もれ、誤解等が多く、それをヒアリング時に確認するのは時間の無駄と感じた。必要十分かつ正確な記入をもとにヒアリングしたほうがよい。

○　実施時間帯が、平日昼間であることが視聴者増には限界があり、アーカイブ動画も長い。ツイッター中継を事務局でもしていただいているが、中継ツイート慣れをした方（プロ？）が担当し、後日まとめツイートまで残すほうが読みやすく関心が高められリアルタイムでなくても関心をもってもらう機会をつくることができる。

○　基金レビューに関しては夕方～夜間に行われたが、それでも視聴率は低かったのではないかと思われる。広報の強化が必要。

○　レビューより、横展開すべき案件、数値の見方などが明確化されるため、是非反映状況を定期的にチェックし改善をしていくべき。

○　中継だけでなく、録画を観れた方が良いとの意見を周囲の複数の人たちから耳にしました。